

論文の内容の要旨

樋口一葉という〈狂愚〉 ―近代日本からの逸脱―

多羅尾 歩

本論文は、明治 20 年代にほぼ確立をみた「天皇制的「正統性」」（丸山眞男『忠誠と反逆』）と、文明開化の中心イデオロギーとしての立身出世主義が不可分に結びついた近代日本の正統性からの、樋口一葉のテキストの逸脱志向を明らかにすることを目的とする。

そのような近代日本の正統からの逸脱性を内在させた一葉の諸テキストの、同時代メディア言説や文学に比べた特異性を析出することを通して、それら諸テキストの歴史超越性を指摘しつつ、文学とは何かという問題に対する一視座を提示することを、本論文はその最終的な目的に掲げるものである。

一葉は明治 20 年代に 20 数編の短編を生み出し、その短い生涯を閉じたが、奇しくも同時代すなわち日清戦争前後期こそ、明治初年から案出されてきた種々の国家制度がほぼ完成を遂げ、忠君愛国思想と立身出世主義とが共軌的に結ばれた近代日本の正統性―国民国家に対する立身出世を通じた忠誠―が人々の内に深く浸透してゆく時期に相当する。

天皇の権威が付与されたその正統性観念を広汎な人々が進んで内面化し、それぞれの内に潜在していた富裕への渴望や威信への憧憬といった欲望を駆動させ、国家がそれを国の富強の原動力として称揚した同時代、その正統性に背馳し、文明開化社会を転落してゆく者たちの非理性的、非功利的な内面を、読者の感情を喚起させる肉声的な語りで表現したのが、樋口一葉の文学である。

メディア言説はもとより、文学もその正統性を様々なかたちで受容する中であって、独特の陰影を帯びたその非合理的なテキスト群は、すぐれて独自の言語空間を形成しているのである。

本論文は以上の基本視点を有した上で、登場人物たちの発する言葉と地の文を圍繞する同時代コンテクストを確認し、近代日本の正統性と緊密に関わるその時代文脈からの逸脱の物語として、一葉のテキストを新たに読み替える試みである。様々な同時代言説を渉猟することによってのみ可能な物語の読み替えを行ったわけであり、故に一葉のテキストと同時代言説を往還的に分析する方法が一貫して採られている。

第1章では、近代日本の正統性からの逸脱志向が、初期作『うもれ木』においてすでに顕現していることを指摘した。

まず地の文が精細に語る薩摩金襴手の意匠に着目、近年詳らかとなった日本美術の創成過程を参照することによって、それらが当時の国家要請と完全に一致すること、すなわち天皇親政を正史として表象するための重要モチーフであったことを発見した。

だが同章はそのことを以て、金襴手を万国博覧会に出展することを熱望する主人公を従来どおり立身出世主義者＝愛国者として捉える証しとはせず、物語言説と心中思惟の様態分析から、むしろその内には烈しい功名心と拮抗するほどの節制的な心性が存在し、それが金襴手の自損という結末を招来したと解釈する。

つまり『うもれ木』は、日本美術という近代日本の正統性に直接関与する領野を舞台に、出世／清貧、欲望／倫理といった対立項の後者に殉じた者の価値観の相剋をめぐる物語であり、テキストがそのような主人公を肯定的に描出していることは、傍らに前者の権化である紳士を悪漢として配していることから明らかである。

とすれば同作は、人々の無制限な欲望追求を国是とする近代日本というシステムを剔抉した物語として再読できるのである。

第2章では、『暗夜』の女主人公の人物表象、外面似菩薩内心如夜叉を、テキスト初出時＝日清戦争時という時代文脈に嵌入することによって、物語を新規に読み直した。

負傷者を看護する女として登場する主人公をめぐる語りは、主として女性誌が生成していた戦時の模範的女性国民＝篤志看護婦、及びその統合的象徴＝美子皇后をめぐる美的言説と比喻表現「女菩薩」に奇妙に一致することが判明した。

だが物語の要諦は、国家に叛心を募らせ代議士暗殺を企てる「女夜叉」、すなわち婦徳の背反者に他ならない主人公の別貌が、三従七去の婦道に背いた者という巷間における看護婦イメージとも暗合していた点にある。のみならず、婚約者の背信という傷痕を抱えた主人公をめぐる語りは、皇庶子の即位を待つ立場にあった現身の美子皇后を想起させずにはいない。

『暗夜』は復古的婦徳の鼓吹期、時代が言祝ぐ女性シンボル達の性的周縁性を、奇しくも主人公のそれとして仮構することによって暴露したテキストなのであり、正統的女性規範を唱道した藤島雪子らの閨秀小説と比べるとその特異さが判然としよう。

第3章では、近代初の対外戦争を経、国民意識が人々の内に根付いた日清戦後にあつて、女性国民どころか国家の恥辱と蔑まれる最下層の娼婦と、彼女に蕩尽することで立身出世を通じた国家貢献を放擲したといえる男の不条理な惨死を描いた『にごりえ』を、『婦人矯風雑誌』に代表される同時代の廢娼言説とは截然とした世界観を示した物語として、再読した。

研究史の死角だった「蒲団や」の注釈考証を試みると、その新奇の生業を勤儉力行によって成功させ築いた身代を「命をも遣る心」で消尽した男と「紙幣」の亡者の擬態を捨てた娼婦の真摯な交情とともに、娼婦の非功利性が浮かび上がる。

テキストは、まったく他者としての娼婦に、女性誌が訓じていた正統的女性規範の柱であった犠牲と献身を体現させることで、娼婦への賤視観に貫かれた廢娼言説に対する尖鋭的な批判性を發揮してもいる。

『にごりえ』は、近代日本からの逸脱の極北の姿にもっとも豊かな意味を与えた文学なのである。

第4章では、賃労働者から妾に転身する主人公の是非を巡って議論されてきたテキスト『わかれ道』を、日本資本主義の成立期、自由放任主義経済下という経済的文脈の中に広げて再読した。

お京吉三の対話に頻出する語「出世」が常に「運」という語を伴う点に注目、同時代小説や経済言説も同様であることから、資本の蓄積と無産者の増大による格差拡大期、人々にとって自助論は空論と化していたことを指摘する。

『東京経済雑誌』等も記したように、人々は互恵なき社会で絶望に瀕していたわけだが、同時代小説（『刷毛彩色』『空行月』等）は、それを夫婦の共助による克服という成功譚に、あるいは玉の輿婚による解決という御伽話に変換させる一方で、テキストは孤児吉三にお京との訣別を、お京には奉公人＝権妻として正妻の支配下に入る厳しい現実を用意したと同章は解釈した。

その結末に至るまでの貧者二人の痛切な言語態を仔細に分析すると、『わかれ道』は畢竟、立身出世という国民の物語の虚妄性を炙り出したテキストであることが判明するのである。

第5章では、姦通小説として受容されてきた『われから』を、同時代の流行メディア「人名録」との間テキスト性を念頭に置いて再読した。

「紅葉館」をはじめテキストには、恭助が人名録によって可視化された富豪紳士の一人であることを明示する記号や挿話が横溢しており、町の呼称の変移を分析すると語り手もま

た、人名録の普及によって生じた筈の“紳士達を望見する我々”の視点を有することが確認される。

結末の追放を招いた町の物思いを、テキストに刻印されたこの紳士隆盛という時代性と関連させて検討すれば、それは、華族との門閥形成という紳士達の野望を恭助も共有することへの強い危惧感と解釈できる。華族の威光に魅せられ出奔した美尾の物語は、町の予覚を裏付けるプレテキストと見ることも可能である。

だが町追放の真因は、物を思うあまりの所為が性的規範を著しく逸脱していたからに他ならず、そのように愚かしいほど政治的判断力を欠いた至純な主人公像は、彼女がその貪婪な功利性を恐れた恭助をはじめとする紳士達を鋭く相対化する。

『われから』は、貪欲を質朴の身ぶりで隠蔽する人名録紳士達の欺瞞性と、彼らを選良として歓迎する近代日本のエートスへの懐疑を言外に示した物語でもあるのだ。

第6章では、正統から逸脱的にしか生きえない者達の非合理的なパトス「狂」「愚」を美的に語ってやまなかった一葉の諸作が、幕末から同時代にかけてやはり「狂愚」に至高の価値を見いだした者達の言説と、通脈しつつも決定的に断絶しているさまを眺めた。

お力の父祖に象徴される、変革のためには自死や窮死も辞さない非合理的主体性は、まさに詩文「狂愚」を著した吉田松陰や、ロマン的「狂愚」と利他的「侠」の発現による「第二の維新」を待望した田岡嶺雲、北村透谷、星野天知、戸川秋骨らと相同する。

だが彼らの唱えた「狂愚」が、蒼生の団結と「国民の元気」を前提としていたのに対し、一葉のそれは国民からの逸脱の謂であり、そればかりか『十三夜』録之助の索漠とした発話を分析すれば、生それ自体からの逸脱、すなわち非合理の極点としての「虚無」と同義でもあった。

終章では、永井荷風『里の今昔』を参照しつつ、物語内容・言説・空間ともに時間の推移による暗転を示した『たけくらべ』が、昭和20年敗戦に至る歴史を暗喩＝予言していたと指摘、日本が国是としての欲望拡大を軍拡へと収斂させ始めた日清戦争中・後に執筆・初出された同テキストの時代超越性を確認した。

閨秀に課された禁忌を犯し、逸脱者、転落者たちの情念や鬱懷や寂寥を、断片的で不透明な言葉によって初めて形象化することで、近代日本の正統性という“今ここにある世界”の支配論理に抗しようとした、或いは時に世界を虚無と観ずることでそれを相対化しようとした作家樋口一葉。

正統／非正統を峻別し、後者を厳しく排除しながら進行していった近代日本に初めて登場した後者の側の女性作家にして、その底辺の境位から近代日本を捉え返す視点を初めて持ちえた女性作家一葉にしか可能でなかった、その非理性的な文学の普遍的可能性について言及し、文学とは何かに対する答えに代えた。